

## 【研究報告報告レポート】

《特集》第一回公開研究会 (2022) 報告要旨

# テーマセッション

## 学びの継続と研究活動の魅力

キーワード: 学び 人生 100 年 研究活動 研究員 魅力

編集 小 関 慶 太 (KOSEKI Keita)

2022 年 12 月 17 日 (土) 15:00～ 八洲学園大学 リカレント研究センター主催「公開研究会」をオンラインで実施した。対象者は、八洲学園大学在学学生 (正科生、科目等履修生、卒業生) を対象とし、参加者の 5 名 (事前申込者 10 名) であった。基調研究報告としてリカレント研究センター センター長である小関慶太氏 (本学准教授) が「地域と市民研究員制度」について報告を行い、その後、テーマセッション (リレートーク) としてリカレント研究員として活動している 5 名が「学びの継続と研究活動の魅力」をテーマに報告し、最後に山鹿貴史氏 (リカレント研究センター 主任研究員/本学准教授) よりコメントを行った。その後、質疑応答を行った。

本稿は、TS 報告の要点をまとめた要旨及び質疑応答の内容、参加者のコメントを掲載する。

### ■テーマセッション■

「学びの継続と研究活動の魅力」

報告者: 八田友和 (リカレント研究員)

浦田誠一 (リカレント研究員)

山崎英明 (リカレント研究員)

三宅啓之 (リカレント研究員)

コメント: 山鹿貴史 (主任研究員/本学准教授)

オーガナイザー・司会: 小関慶太 (研究センター長/本学准教授)

## テーマセッション (リレートーク)

(司会)

最初に、リカレント研究センターリカレント研究員として関わってみようと思った動機、きっかけを教えてください。

(三宅)

八洲学園大学のWEB ページを拝見して、リカレント教育やリカレント研究というところに惹かれて応募いたしました。何年か前に八洲学園大学を学士入学で卒業しており、継続してなにかできることがないかと思って探していたところでした。

(浦田)

自分の仕事に生かすため、10年前から、「学び直し」をしてきました。仕事をしながらの学び直しであるため、学びの場所を通信制大学に求めていました。偶然「八洲学園大学のホームページ」を見ているとリカレント研究員の募集案内を見つけました。「リカレント」という言葉の響きが私が求めている学びの場所だと思ってすぐに応募しました。通信制大学のよさは、オンラインで繋がることです。遠くの方々と研究について語り合えること、自分の目指す研究活動を担当の先生からアドバイスしていただき進められることが魅力となっています。

(八田)

八洲学園大学のWEB ページで、リカレント研究員の募集案内を見たことが直接のきっかけです。募集案内には、「通信制大学ならではの取組として、大学と研究員は全国どこからでもオンラインで結ばれます。選考から研究活動もオンライン上で実施します」と書かれていたので、「関西在住の私でも参加できる!」と感じ、すぐに応募しました。加えて、定例研究会で自身の研究成果を発表できることや、『リカレント研究論集』にレポートを投稿できることも応募した理由の一つです。

(山崎)

もともとは「社会教育士 (社会教育主事任用資格)」を取得するため、八洲学園大学に正科生 (資格・リカレント編入学) として入学していました。たまたまHPで募集案内を目にしたことがきっかけで制度を知ることになりました。資格も無事に取得ができたため、次はリカレント研究員としても勉強・研究できたらと思いました。

(コメント)

皆さんに共通して「リカレント」というのがひとつのキーワードになっているようですね。また「通信制」や「オンライン」であるという点も、場所の制約を越えて研究活動ができる魅力であったことがわかりました。

(司会)

リカレント研究員の方は、それぞれご自身で設定した研究テーマ、研究計画に基づきリカレント研究センターで主体的に研究活動を行っています。それでは、研究テーマと内容についてご紹介ください。

(三宅)

研究テーマは、「日本人が引き継いでいくべき道徳や叡智を探る」です。

時代の変化に合わせて、道徳とかも変わっていくと思いますが、日本人が昔からもっている道徳や倫理を探していき、それを具体的な話として紹介できるように研究することをしております。特に、お金の分野については、これからの金融リテラシーとも合わせて、日本人がお金とどう付き合ってきたのかを明らかにしたいと、文献を読んでいます。

(浦田)

大きな研究テーマは、「支持的雰囲気をもたらすよりよい学級経営」です。

最近の「学級経営」難しさは、教育現場に携わるだれもが感じることです。そこで「支持的雰囲気」を大切にしたい学級経営のあり方の研究を深めてきています。私の研究における『支持的雰囲気とは、互いに認め合い、支え合う学級、失敗や間違いを気持ちよく受け入れることのできる人的環境、どの子にとっても居心地がよく、互いに学び合える学級と考えています。このような学級を目指すために遊びや絵本、道徳を中心とした研究を行っています。今年は「チームで行う道徳科の授業」と「絵本を中心とした感動教材を用いた道徳の授業」について、いくつかの学年や学級で授業実践を繰り返しながら比較、検討しています。

(八田)

研究テーマは、「学校教育と博物館の連携（博学連携）」です。

学校教育現場では、ホワイトボードや黒板、タブレットから情報を得る「見る力」と、教員や同級生の話などから情報を得る「聞く力」が重視されており、「触れる」「匂う」「味わう」という感覚器に働きかけることはほとんどありません。そのため、児童生徒の「見る力」「聞く力」が弱く、間違っただけで情報を認知・整理してしまった場合は、不適切な行動に繋がることが多々あります。よって、なるべく多くの感覚器に働きかける教育活動を展開することが大切だと思っています。

一方で、「触れる」「匂う」「味わう」を学校教育に取り入れることは容易ではありません。そこで、博物館が活躍します。博物館が所有している実物資料に「触れる」、悠久の歴史を「匂い」で感じるような教育活動を取り入れることで、子どもたちの五感に訴える学習に繋がると考えます。このように、博物館の「強み」を組み込んだ学習は教科書の域を超えた「学び」を創出し、児童生徒の豊かな人間性を育むことにも繋がると考えています。また、教員が学びの素材として有効活用できるものが無限にあり、歴史と人類の営みをよりわかりやすく体系的に教えることもできると思っています。今後も、博物館や学校教育の可能性に目を向け、研究活動を続けていこうと思います。

(山崎)

**現在の研究テーマは、「保育者養成における“表現”の指導法について」です。**

これまで“音楽表現”の基礎としてピアノや声楽などの演奏法を対象に保育者が身に付けておきたい知識・技術を明らかにするための研究をおこなってまいりました。現在は「子どもの発達と表現」をテーマに、音楽を軸にしつつも、表現領域（造形表現や言語表現などのあらゆる表現を含む）が保育実践としてどうあるべきかを捉えています。将来的には子どもだけではなく人間発達の観点から、子どもから成人、お年寄りまでに至る「生涯音楽」の観点から表現を捉えていけたらと考えています。

(コメント)

「道徳」や「学級経営」、「博学連携」や「保育者養成」など、リカレント研究員の皆さんそれぞれのバックグラウンドに根ざした、多様な研究テーマを追及されていることがわかりました。こうした幅広く多様なテーマについて研究できる点が、「生涯学習学部」を擁する本学リカレント研究センターの「良さ」であるといえるのではないのでしょうか。

(司会) 2022年度は、博学連携、道徳教育、学校図書館、保育教育方法と様々な分野の研究が活発に行われています。過去には、犯罪社会学やキャリア学の研究も行っていた方も参加されていました。それでは、研究活動の魅力を教えてください。

(三宅)

昔が古くて、今が新しい、ということは、必ずしも当たらないのではないかと思えるようになったところが、研究をしていてわかってきたことです。昔の人の知恵は、それなりに意味があったもので、現代の我々が忘れてしまっているようなこともありますし、今の我々の道徳とか倫理は、実は昔から変わっていないとか、そういうことが研究の過程で分かってくるのが、研究をしていて面白いと思うところです。

(浦田)

教育の専門家としてプロとして授業をすることは「やりがい」があり、児童の学びに「ワクワク」するものです。私自身も新たな課題を見つけ研究を進めるときは「ワクワク」します。教師は、初任者から熟達化へとキャリアを積み上げる中で、目の前の生徒指導や校務分掌の仕事に追われ授業の方法や児童の見取りは経験知として成長していきます。しかし、ゆっくりと研究を積み重ねる時間がなかなか持てない状況にもあります。

私にとっての研究活動はこのように今まで何となくもやもやしていた気持ちに方向性を示し、「スッキリ」させてくれるものです。また、この研究がいつか学校や地域の教育に生かされることを夢見ています。それが自分自身のモチベーションになっています。

(八田)

私にとって研究活動は、楽しく・面白く、そして時間を忘れて没頭できるものです。勤務校にも、研究活動に取り組んでいる生徒が一定数います。その生徒は、四六時中、友達と遊んでいるような生徒でしたが、今は、友達との時間も大切にしつつ、時間さえあれば調べ学習・研究活動に邁進しています。私自身もそうでしたが、年齢に関係なく没頭でき、夢中に取り組めるものが「研究活動」だと思っています。

また、研究活動は、すぐに成果が出るものでもなければ、必ずしも社会の役に立つものばかりでもありません。ですが、「すぐに役立つものは、すぐに役に立たなくなる」という言葉もあります。先人たちが残した先行研究からヒントを得て、自身も研究活動を行い、学会発表や論文、レポートといった形で社会に還元し、蓄積していくことが大切だと思います。そして、その成果をまた次の世代に引き継いでいく、先人から受け取ったバトンを、次の世代に渡せることも研究活動の魅力だと思います。

(山崎)

研究は海水と同じだと思います。海水は飲めば飲むほど喉が渇くように、勉強は、すればするほど「もっと知りたい」という欲求が生まれるものです。研究活動を進めれば進めるほど、自分の無知さに気付くのも不思議です。自分の問題意識についてどのような角度でアプローチをすれば、少しでも答えに近い”何か”に辿りつけるか、というのが自分にとっての研究活動だと思っています。そして、研究の成果(結果=答え)を一番最初に知ることができるのは自分自身であることが研究の魅力でもあります。ある研究が一定の部分まで達成されたときには既に「次はこれが知りたい」と無限ループのように出てきます。このループは死ぬまで終わらないと思います。

(コメント) 1

全体的に、研究とは「すぐに結果が出ない」というご意見が共通しているように思われました。しかしだからこそ、新たな知見を探求することへの「楽しさ」や「奥深さ」があるというのが魅力であるという点も共通しているように感じました。

(司会)

リカレント研究員になって「よかった」ことを教えてください。

(三宅)

リカレント研究員は、研究に対して、ハードルを下げてもらえたところが良かったです。難しい研究というよりも、素朴な疑問を深堀していくようなことで、他の研究員のかたとの講読会などで意見交換をすると、新しい気づきが得られます。研究活動は、いってみれば、いつも何かを深堀していくことを忘れないということを感じさせてもらえるので、面白いと思います。

(浦田)

私自身が年齢を重ねる中で、培ってきた経験などをどのように若い先生方に伝えていけばいいかと考えてきました。伝えるためには新しい感覚も必要だと感じ学び直しがはじまりました。具体的には通信制の大学に編入し卒業したり、通信制の大学院に入学し修了したりしたことです。大学院の修士を修了したときふと浮かんだことはもっと学びたい、大学院での研究を続けて行きたいという願いでした。

そんなとき、まったく偶然、八洲学園大学の WEB ページを見て「わたしにとって素晴らしい環境かな」と思いました。そこで応募してみたのですが、実際リカレント研究員になってよかったと思えることは、研究が継続することと、目の前の児童や教職員に今私が行っている研究が還元できることです。ここで学んだことを色々な形でアウトプットしています。今考えるとこのようなことができるのは、的確なアドバイスをくださる先生方やいっしょに学ぶことのできるリカレント研究員の存在があるからです。

特に今年度は、「研究員主催のサロン研究会」を月 1 回実施しています。職業も、住むところも、年齢もバラバラな仲間と語り合うことは素晴らしい経験になっています。

(八田)

八洲学園大学の先生方やリカレント研究員の方と繋がりができたことです。リカレント研究員の皆さんは、居住地・年齢・職業もバラバラなので、普通に生きていたら、おそらくお互い一生出会わなかったと思います。ただ、このリカレント研究員制度を介して、オンラインで多くの方と繋がることができました。オンライン上ではありますが、多くの方と繋がりが生まれ、交流できることは、私にとって大きな財産になりました。

また、勤務校での実践に、リカレント研究センターでの学びを反映できたことも「よかったこと」「嬉しかったこと」です。自分が「やってみたい！」と思った授業構想を、定例研究会やサロン研究会で発表し意見をいただくことで、様々なアドバイスを踏まえた授業実践を行うことができました。子どもたちにより良い授業を提供できたという意味でも「よかった」と思っています。

(山崎)

研究活動はインプットだけではなく、アウトプットがセットになって初めて“完成”するものです。そのためにも研究で知り得た知見は自分のものだけにしておくのではなく、社会のために、学術のために広く公開されるべきだと思います。その点、異なる研究者同士の交流を通じて共有することができるのがこの制度の良いところだと思っています。切磋琢磨しながら積極的に研究活動をおこなっていることがリカレント研究員という制度の最大の魅力ですね。投稿した論文がオープンアクセスになっていることも大きなモチベーションになっています。リカレント研究センターの教員やリカレント研究員たちとの交流は毎回楽しく、大変勉強になっています。

(コメント)

多様なバックグラウンドを持つ方々だからこそ、センターでの研究交流を通じた「インプット」を、それぞれのフィールドでの「アウトプット」につなげられるというわけですね。これは通信制でオンライン主体のリカレント研究センターならではの強みだと思われま

(司会)

**定例研究会・サロン研究会で報告や『リカレント研究論集』にご自身の研究論文や研究ノートが掲載された際の気持ちを教えてください。** 私自身は、大学院博士後期課程1年次(2008年)にはじめて現代刑事法研究会で「少年審判の参加制度について」、改正刑事訴訟法の被害者参加制度との関連性から報告をした際に、指導教授(当時)から褒められたことと、報告レジメ欲しいとおっしゃられた事を今でも覚えています。また研究論文をはじめて投稿(2017年9月)した際は不安がいっぱいでしたが、大学院修士課程からお世話になっていた先生より「80%妥協で脱稿すれば良い」という言葉に救われた思い出があります。今も80%妥協で脱稿しています。本学の学生を対象とする教員主催交流会(年2回開催)でも、印刷教材(テキスト科目)の課題で提出を躊躇してしまうことがあると思うが、100%の完璧ではなく80%で心に余裕を持った対応をしてみてもいいことを伝えています。

**研究員の皆さんの研究会報告・論集への論文の掲載に対する思いをお聞かせください。**

(浦田)

はじめは、私の研究実践が『リカレント研究論集』に載ったときは「ドキドキ」しました。そのうちに「ワクワク」してきて次年度への意欲がわいてきました。2022年度は、ちょっと無理をして3本の研究実践をまとめています。研究には終わりがなく次に繋がるものだとつくづく思いました。今までは、教育の実践家として頑張ってきましたがこれからは、今までの実践を成果としてまとめることの楽しさを感じています。

(八田)

『リカレント研究論集』は、八洲学園大学学術情報リポジトリとして、インターネット上で公開されるので、まずは「多くの人に見てもらえる…かもしれない」という気持ちになりました。自身の研究ノートが公開された年は、新型コロナウイルスが猛威を振るい、外出が憚られた時期でもありました。そのため、自宅にいながら、研究ノートを見てもらえる『リカレント研究論集』の存在は、研究成果を多くの人に知ってもらおう上でも、非常に有益だと思っています。また、原稿は執筆して終わりではなく、その後のフィードバックや評価、感想などが大切だと考えているため、まだまだ気は抜けないな…という気持ちでもあります。

(山崎)

研究活動は孤独で根気が要るものです。だからこそ、その成果(論文や報告書)は一人でも多くの人の目に届いて欲しいと思うものです。それが一つの形として実ったときは、どんな時でも言葉にできない嬉しさがあります。他の先生方の成果を目にすると「自分も頑張らないと！」と奮い立たせてもらえるし、投稿した論文が機関リポジトリとしてこの先、半永久的に残る(公開)ことを考えると、内容はもちろん、誤字脱字などの細かい部分にまで気を遣うことになります。出版されたら修正できないですからね。自分の“分身”でもある研究成果が、他の誰かの先行研究として僅かながら貢献ができることに最大の喜びを感じます。

(司会)

これからリカレント研究員の仲間と一緒にやりたいことなどはありますか。毎年行われている交流会では、共同研究や外部研究費の取得を目指したいと話しています。

(八田)

「共同研究」にチャレンジしたいと思っています。

先ほどもお話ししたように、リカレント研究員が研究対象としている分野は、本当に多様です。だからこそ、お互いに協力し、知恵を出し合うことで、面白い・多様な研究活動ができると思っています。

現在は、月に1回程度、研究員が集まり「勉強会」を開いています。この勉強会では、課題図書である『ケーキの切れない非行少年たち』を章ごとに要約し、月交替で内容を報告しています。今後は、「勉強会」の取り組みを深化・発展させつつ、共同研究など多様な活動に取り組んでいけたらと思っています。その際、学会や団体から助成金や補助金をいただけるようにアプローチできれば良いなと思っています。

(山崎)

この「出会い」だからこそできる共同の仕事ができれば、この上ない喜びです。研究活動として“共同研究”をおこない、プロジェクトとして科学研究費の獲得などにも挑戦できたらと考えています。また、将来的には研究活動や生涯学習に関する成果や持論などをまとめた共著などが出版できたら嬉しいです。そのためにも皆さんともっともっと仲良くなりたいです。月に一度の勉強会が開催されているのですが、今年度はスケジュールの兼ね合いから参加ができていません。それが悔しいですね。

(浦田)

私たちでおこなっている「サロン研究会」で三宅さんと話したことを思い出します。それは、私と三宅さんは研究テーマが近いことから「もし、小学生の授業で参考にしたいことがあればいくらでも私が授業実践やりますよ。」と話したことです。担当の先生から指導を受ける縦のつながりと私たち研究員同士の横のつながりができて共に学び合う機会があれば、色々な方が集まっているリカ



レント研究員の意味があると思います。

(三宅) 他の研究員のかたは、教育関係のお仕事をされているので、なにか教育に使いやすい資料とか事例とかそういうものが提示できたら面白いと思います。実際に使っていただいて、フィードバックをいただくことで、もっと深堀ができるような気がします。道徳や倫理については、やはり実践というのが重要だと思いますので、研究員同士でできることがあるというのは、とてもいい環境だと思います。

(山鹿)

研究員の皆さんを中心に共同研究ができれば、素晴らしいと思います。ただその一方で、外部研究費などを取得する際にはテーマを統一する必要がありますので、皆さんで共同研究を進められるテーマを探すのが、大変かもしれません。

(小関)

山鹿先生のコメントにもあるように、外部研究費取得の際には具体的なテーマと計画が必要となってくるのではないのでしょうか。たくさんの方の参加、研究員相互の切磋琢磨な研究活動とその環境作りのサポート、長期的な観点から共同研究プロジェクト→研究会報告・学会報告を踏んでから共同研究の計画、外部研究費取得→研究報告→1冊の成果本の制作ができれば理想的です。次年度からは、学習会と併せて研究員の方々が主となるオンライン交流会を行えたらと考えています。

(司会)

**最後に、これからリカレント研究員を目指す方へ一言お願いします。**

(三宅)

リカレント研究というのは、素朴な疑問を考える機会を与えてくれるので、気負うようなものではなくて、なにか普段の生活の中で疑問に思うことを、一緒に考えてくれる研究員と話し合いをして、新たな気づきが得られるものだと思います。今年で1年目なので、成果物としてのレポートなどには、至っておりませんが、「なぜ？」っていう気持ちをちょっと深堀してみると、見えていなかった世界が広がるというのは、このリカレント研究の魅力だと思います。

(浦田)

最初は緊張しながら参加したリカレント研究センターです。現在コロナ禍で、対面的な研究ができない面もあり不安がありました。でも、続けてみると結構、いやすごく学ぶことができます。「自分の課題を見つけて、調べて考えて結論を導き出す」研究をこれからも続けていかなければと思っています。そう思ったきっかけは、リカレント研究センターのリカレント研究員になったことだと思います。年齢も、立場も、住んでいるところも異なる者同士が集まることはすばらしいことだと思います。ともにリカレント研究センターリカレント研究員として活動してみませんか。今の仲間

達は皆さんの参加を心待ちにしています。

(八田)

「研究員」と聞くと、何となく「難しい」「敷居が高い」と思いがちですが、個人的には全くそんなことはないと思っています。

少し前に、岡山県笠岡高校に在籍する生徒が「セミの寿命は1週間」という俗説・常識を打ち破る発表を行いました。その生徒は、多数のセミの成虫を捕獲し、油性マジックでセミの翅に番号をマーキングして逃がし、再び採集する活動を行うなかで、セミの寿命が平均1か月程度であることを明らかにしました。このように、「なんでだろう」「知りたい」と感じたことをそのままにせず、深く調べ、追究することが、もう研究活動だと思っています。高校生はもちろん、中学生でも小学生でも、それこそ幼稚園児・保育園児でも研究活動は可能だと思います。リカレント研究センターでは、担当教員の先生、リカレント研究員のメンバーがお互いに支えあって研究活動ができます。皆さまと、一緒にリカレント研究員として活動できることを楽しみにしています。

(山崎)

研究は日頃の「問い」から始まります。疑問に思ったこと、知りたいと思ったこと、これらが出発点です。幸いにもリカレント研究センターでは第一線で研究活動をされている先生方からアドバイスを受けることができますし、リサーチサロンや勉強会などの知識のシェアリングがおこなわれています。そのため、初心者でも安心して活動できる場だと思います。年齢や経験や肩書きなどの垣根を越えて、自由に自分の知識を追求・表現できるプラットフォームだと思ってください。リカレント研究員として一緒に活動できることを楽しみにしています。

(小関)

八田リカレント研究員の報告にあるように、研究・探究活動を行いたい(行う)際に年齢制限はないかと思います。私自身、サイエンスキャッスル関東大会(2022.12.3/天空橋)に研究コーチ(株式会社リバナス)として関わりました。中高校生の学会報告を聞いていて驚くことが非常に多かったです。また現在行っている共同研究の中で子どもたちと共に学会報告(2023.3)を行います。リカレント研究センターでは、研究会での報告の機会、論集への投稿の機会を設けていますが、これらが強制ではありません。それぞれのリカレント研究員のペースに応じた研究活動・探究活動を自主的に行っています。大学卒業後、「学んでみよう」「調べてみよう」「考えてみよう」「モヤモヤを解消したい」様々な目的を持ち、研究員相互でその目的を達成していただけたらと思います。またリカレント研究センターは、他にはないアットホームな空間です。毎年秋～冬にかけて次年度から活動するリカレント研究員を募集しますので是非ご応募ください。

(司会)

これでテーマセッション、リレートークを終了します。ありがとうございました。

ここで5分間の休憩としますので、質問がある方は事前に配布したGoogleフォームに記入して送

信をしてください。

## 質疑応答

(質問) 公開研究会でリカレント研究センターでの研究活動の良い面を知ることができましたが、研究活動等を通して辛いこと、辛かったことを教えてください。

(八田)

リカレント研究センターでの「研究活動」を通して辛かったことは、対面で先生方や他の研究員の方と会えないことです。先ほども紹介しましたが、研究員の方は居住地・職業・年齢など、全てがバラバラです。もちろん、研究テーマもバラバラです。だからこそ、「聞いてみたいこと」「教えてもらいたいこと」がたくさんあります。ですが、オンラインでは突っ込んだ話をするのが、なかなか難しいです。小関先生もおっしゃっておられましたが、オンラインの研究会や集まりは「全国どこからでも参加できる」といったメリットがある反面、「なかなか議論が活性化しない」というデメリットもあります。素敵な先生や研究員の方が多いからこそ「辛いな…」と感じる瞬間でもあります。素敵な研究員の方が多く集まっておられるので、直接お会いできないことはとても辛いことですが、いつか、どこかのタイミングで会えたらな…と思っています。

(浦田)

リカレント研究センターでの「研究活動」でつらかったことは、つらかったということよりも難しいことは、「研究テーマ」を考えてその課題について研究していく方向があっているか自問自答することです。対面では、相談できたり、指導をうけたりすることがすぐにできると思います。しかし、オンラインではなかなかそういうことには行きません。もう少し相談できるといいなあと思っています。

(山崎)

これまで研究活動の良いところやリカレント研究員のメリットなどを紹介しましたが、実はこれはほんの一部の話であって、全体として言えることは研究活動というのは、辛いことの方が多いということです。それでも続ける理由は、成果が実った際には辛さも吹き飛ばすほどの喜びがあるからです。具体的にどのような点が辛いかは研究者ごとに異なると思いますが、おそらく共通することは「時間の確保」だと思います。センターの教員や我々研究員は研究活動で給料が出ているわけではなく、仕事(日ごろの業務)をこなしながら、それと並行して研究活動をおこなっています。業務内容によって繁忙期もありますから、人によって研究時間を確保することが難しくなる場合もあるでしょう。それでもメ切は待ってくれないので、限られた時間の中でできるだけ充実した研究になるように苦戦しているのではないのでしょうか。

(小関)

これまで6名のリカレント研究員の研究アドバイス、添削アドバイスを行う中で、オンラインの限界を感じることはあります。同じ資料が手元にあるわけではなく、オンライン上で資料の共有にも限界があります。研究アドバイスでは、Google ドライブ共有の資料を活用することがありますが、それだけでは不十分なこともあります。Google Meet のコンパニオンモードで資料を共有しながら研究(添削)アドバイスを行うこともありますが、オンラインの場合の質問の機会、回答の機会が難しい点が今後の課題になってくるのかと思います。

(質問) 研究時間はどのぐらいですか。

(八田)

私は現在、通信制高校で勤務していますが、子どもたちが毎日登校するという、通信制高校の中では少し特殊な学校で勤務しています。なので週5日フルタイムで勤務しています。そのため、普段まとまった研究の時間がとれません。行き帰りの電車や駅の待ち時間などのスキマ時間を使って、コツコツ研究活動に取り組んでいます。一方で、学校に勤めていることもあり、子どもたちが登校しない夏休みや冬休みは、比較的まとまった時間がとりやすくなっています。その時間を有効活用して、論文執筆や学会発表資料の作成を行っています。日々コツコツ論文を読んだり、情報収集した成果を長期休暇等で論文などの形にまとめています。

(浦田)

私は現在、公立小学校の特別支援学級の担任をしています。朝、6時30分ごろから夕方5時まで勤務しています。その間、休み時間もなく児童と接したり、校務をこなしたりしているため通常はなかなか研究の時間が取れません。研究時間の中心は長期休みなどになります。今も成績処理で忙しい時期です。しかし、少しでも時間を見つけて研究を継続したいと思っています。

(山崎)

まず「研究時間」は何を指しているのかですが、おおよそ3つの側面に分かれると思います。一つ目は文献講読の時間、二つ目はデータを取得するための時間(実験、図表の作成など)、三つ目は執筆の時間です。これはおそらく研究活動の共通内容だと思います。これらをそれぞれの仕事をこなしながら隙間を見つけてはおこなっているのです。

私の場合、あまり長い時間集中できる性格ではないので、1時間を2つのユニットに分けて、1日8時間勤務だとして16ユニット、手帳などを駆使しながら通常業務と研究活動を計画的に入れ込んでいます。1ユニットは25分で、ユニットごとに5分休憩をしてリフレッシュしています。コツコツ継続できる性格が一番このやり方に合っています。普段は大学の教員をしているので授業がない時間、学生対応がない場合は研究の時間に当てることができそうですが、業務がかなり流動的なため(突発的な仕事が多い)計画通りにいくことは寧ろ少ない気がします。

(山鹿)

私も小関先生も通信制の大学の教員ですので、通学課程には存在しない「印刷教材等による授業」のレポート添削指導などがあります。そのためレポート添削の繁忙期や授業期間中とそうでない時期とで、研究に割ける時間はかなり異なってきます。

(小関)

山崎リカレント研究員の回答にもあるように、研究活動と様々な類型があります。研究テーマに対する研究活動や教員としての教育研究活動があります。

前者の個人テーマに対する研究活動に関してですが、現在進めている研究の1つとして「特定少年の実名公表（検察段階）、実名報道（新聞社）の基準の研究」があります。本研究は、新聞記事を研究資料として使うため、午前中にデータベースや新聞紙、デジタル版のチェック・調査を行い、午後から出力したものを整理・検討する関係で週1日（レポート添削の繁忙期除く）は研究日として設定をしています。しかし、1日まるまる使えるのは月1~2回程度です。あと月に2~3回ほど合間時間を活用して公立図書館、大手書店、SNSで新刊等の情報収集をしています。通勤電車で文献講読を行っています。

後者の教育研究に関しては、前述のように公立図書館、書店での情報収集と資料の入手が主となってきます。今年度は、「生涯学習学部の刑事法教育のこれから (2) -メディア授業を活用したテキスト科目「犯罪と心理」(2022)の取り組み-」『八洲論叢 (2)』でまとめたように印刷教材科目（テキスト科目）において、メディアを活用した授業を試験的に行いました。また印刷教材科目の課題、試験の難易度調査も行っています。これらのデータに基づき次年度以降にどのように生かすかなどを検討しています。

山鹿先生の回答にもありますが、通信制大学は通学制の大学と異なり、長期休暇にはスクーリング授業が集中しています（科目・教員によっては平日スクーリングもあり）。また印刷教材科目の添削指導に要するいわゆる繁忙期が発生します。よって時間の確保が難しくなってきます。

**(質問) 遅くなりましたが研究センター長の小関先生に質問です。共同研究についてどのようにお考えでしょうか。**

(小関)

リカレント研究センターで研究活動を行っている研究員の研究分野、研究テーマ、手法、研究活動に費やせる時間は様々です。よって大きなテーマを設けて全員参加型と分野別に分けて研究員数名とセンター付専任教員で行う方法があるかと思います。2023年度よりベテラン研究員を中心に行っていきたいと考えています。

## 参加者からのコメント紹介

- ・入るのに手間取り、遅くなってしまいましたが、研究員の皆さんがお仕事をしながら研究活動に打ち込まれているのに感心いたしました。
- ・今回のミーティングを通じて、リカレント研究員の活動内容について理解することができました。論集が公開されましたら、拝見させていただきます。

## おわりに

八洲学園大学リカレント研究センターは、開設3周年を迎えました。これまで10名の方からの応募があり、8名の方にリカレント研究員として任命を行いました。(2022年度段階で1名辞退、2名退任)現在、5名(任期:2023年3月)の方がリカレント研究員としてそれぞれが設定した研究テーマを主体的、自主的な研究活動を行っています。

本研究会を行うにあたり基調研究報告として「地域社会と市民研究員制度について」調査研究を行いました。情報の不透明さを感じました。本センターにおける研究活動の様子は、情報発信方法として八洲学園大学教員 BLOG で紹介する程度ですので、外部から見ると不透明さを感じるころではないかと思われ。本課題も公開研究会を通して研究員の活動が少しでも多くの方に伝わったのであれば嬉しく思います。また本学の卒業生に限らず、オンラインの特性を生かし、様々な地域から応募、リカレント研究員として活動・活躍をしていただけたらと願っています。

受理日:2022年12月26日

小関慶太  
八洲学園大学 生涯学習学部 准教授  
リカレント研究センター 研究センター長